

児童の対人関係の希薄さに関する研究

有 倉 巳 幸・猿 渡 功

(2001年10月15日 受理)

A Study of weak connections of interpersonal relationship in pupils

YUKURA Miyuki and SARUWATARI Isao

いじめや不登校など、学校が抱える問題の原因にもなり、結果にもなるのが、子どもたちの人間関係である。子どもたちの周りにある人間関係は、大人と同様、彼らの生活に大きな影響を及ぼす。従って、子どもたちの人間関係に焦点を当てることは、子どもたちの心の姿をとらえる上で、また、学校が抱える問題を考える上で、重要であると思われる。

子どもたちの人間関係について、先行研究は、その関係のあり方や、その関係の中で見られる行動、適応感など精神的健康に及ぼす影響に対して、様々な方法を用いて明らかにしてきた。これらの研究が指摘するのは、親や友人など子どもにとって大切な関係が彼らの社会化をはじめ、集団の中での適応行動や彼らの適応感に強い影響を及ぼすということである (c. f. 佐藤・立元, 1998; 丹羽, 1999)。これらの問題に関する心理学的研究は非常に多いので、近年の研究にとどめるが、例えば、小嶋・宮川・佐藤 (1997) は、小学生を対象にソーシャルサポートと学級適応との関係を検討している。その結果、両親や友人から受け取ったサポートは教科成績との間に相関は得られなかったが、孤独感など学校適応との間には有意な相関がみられたことを明らかにしている。森下 (1998) は、学校でのストレスに対して両親や教師からのサポートがストレス反応を軽減させるのかについて、小・中・高校生を対象に検討している。その結果、登校拒否感情や攻撃性、抑うつ性といったストレス反応に対して、サポートの効果が認められた。有倉・伊藤・菊川・大谷 (1999) は、小学校5年生とその母親、担任教師を対象にした調査を行い、母親から受け取ったサポートは、本人の幸福感だけでなく、担任教師による適応度評価でも有意な相関が見られた。このことは、受け取ったサポートと子どもの適応との関係が、子どもたちの行動を観察できる担任教師からも明らかになったということである。江村・有倉・岡安 (2000) は、中学生とその担任教師を対象に調査を行い、生徒の評価と担任教師の評価から、適応群、内的適応群、外的適応群、不適応群の四つの適応タイプを挙げ、学校で知覚されるストレスや不登校傾向に及ぼす影響を検討した。重回帰分析の結果、適応群では、学業に関するストレスが、外的適応群では、教師や友人との関係におけるストレスが、そして、不適応群では、学校での集団そのもののストレスが不登校感

情に寄与していることが明らかになった。このうち、教師からは適応していると思われる外的適応群の生徒は、教師や生徒との対人関係の問題を引き金に学校に行きたくないという気持ちが高まっているという知見は興味深い。以上の研究からも明らかなように、親や友人、教師といった重要他者との関係は、子どもたちの適応にとって重要なものであると言えよう。

ところで、こうした親密な関係が子どもの適応上重要であるという知見にも関わらず、その一方で対人関係の希薄化が問題になっている。他者と親密な関係をもてず、孤立してしまったり、嫌われることをおそれて他者に同調してしまったりする人々が注目されてきている。さまざまな論説でも言われてきているが、心理学的研究でもこうした問題に着目し、その実態や特徴を明らかにしている。

例えば、上野・上瀬・松井・福富(1994)は高校生を対象に調査を行い、心理的距離と同調性の二次元から、表面的、個別的、密着的、独立的の四つの交友関係に分類し、自己概念評価の違いを検討している。この中で、表面的交友関係は、心理的距離が遠いにも関わらず相手に同調していくといった特徴をもっており、現代青年の特徴の一つを代表している関係のあり方である。このタイプは、内面では相手との距離を感じているにも関わらず、表面的には相手と行動を共にするといった矛盾を抱えている。

また、岡田(1995)は、大学生を対象に友人関係に関する調査を行い、因子分析を行った結果、1)互いに傷つけあわぬように気を遣う(気遣い)、2)互いの領域に踏み込まぬよう関係の深まりを回避する(表面的-内面的関係)、3)楽しさを追求し群れる(群れ)という三つの側面を明らかにした。そして、これらを現代青年の友人関係の特徴として考え、岡田(1999)では、普段つき合っている仲間のうちで最も親しい人に当てはまる程度(友人評定)、実際自分に当てはまる程度(現実自己評定)、こうした関係を欲する程度(理想自己評定)をそれぞれ評価させた。その結果、「表面的-内面的関係」では、理想自己評定が、現実自己評定や友人評定より高く、このことは、現代青年が友だちに対して心をうち明けたり、悩みを相談したりするといったことを理想としながらも、実際にはそうした内面的な関係が自分も友人もとれていないことを意味している。また、「群れ」でも、理想自己評定が、現実自己評定や友人評定より高く評価された。この結果から、現代青年が自分の理想に反して群れているのではなく、むしろ積極的に群れ関係をとりようとしていることが示唆された。岡田はこれらの結果より、内面的関係と群れ関係の両方を現代青年は理想としていると結論づけている。

さらに、折谷(1999)は、現代青年の人間関係が希薄化していることを踏まえ、自他の視点に着目した研究を行っている。その際、他者との防衛的なつきあい方を「自分が傷つかないように、相手との間に距離をおいた部分的な関係を保ち、さらに相手を傷つけないように気を配るようなつきあい方」と定義し、対人葛藤の処理の仕方との関係を検討した。この対人葛藤は、互いの意見や欲求が食い違うというように、自他の相違点がはっきりしている。そのため、自他の視点の相対化ができていくかどうかを確かめる上で有用である。なぜならば、もし、相手の役割を取得していない

ならば、その視点は自己の視点を否定し傷つけるため、相手に対して防衛的な関係を形成することになるからである。これに対して、相手の視点を取得し、相手の立場を理解できるならば、相手の視点は自己の視点を明確にする手がかりになろう。これらのことから、対人関係の希薄さに見られる気遣いや表面的関係などの防衛的なつきあい方は、相手の視点の取得ができていないことによるものと考えることができよう。

以上に代表される対人関係の研究からは、心理的距離を遠く感じたり、気を遣ったり、相手の視点を取得できず防衛的につき合ったりするといった知見に見られるように、現代青年の対人関係が親密さを避け、希薄化していると感じさせる。そして、そのことはとりもなおさず、青年期にとって大きな問題であろう。なぜならば、青年期にとって、親密さは対人関係上の重要なニード (Buhrmester & Furman, 1986) であり、この時期に、十分な親密さを友人や異性との交流をとおして獲得することが、自立において共感や精神的安定をもたらす糧となる (遠矢, 1996) からである。

しかし、対人関係の希薄さの構造や影響を考えるならば、親密さのニードが出現する前青年期 (9~12歳) にも着目すべきであろう。その点では、上述の研究に代表されるように、そのほとんどが高校生や大学生といった青年を対象としており、小学校高学年といった前青年期を対象にした研究が少ない。

尾見 (1999) は、小学5年生、中学1~3年生、高校2年生を対象に社会的ネットワークの研究を行ったところ、小学5年生から中学にかけて、サポート提供者が親から親しい友人へと移行していることを見いだした。この知見からも明らかなように、小学校高学年は、それまでの親子関係から友人関係へと、その重要性が変化していく時期にあたる。この時期にどのようにして友人をはじめとする他者と交流していくのかは、青年期以降の対人関係の希薄さを考えていく上でも重要になる。

こうした点を踏まえ、猿渡 (2001) は、児童の対人関係の希薄さ尺度を作成し、キレるやムカつくといった攻撃性との関係を検討した。この研究ではまず、教師を対象に、児童の対人関係が希薄さになったと感じる考え方や行動を尋ねることで、その実態を収集することから始まった。収集したデータと先行研究を踏まえ、対人関係の希薄さを「他者の視点に立てなかったり他者を利する観点の欠落・弱さが見られたりする関係のあり方」と定義した。データはKJ法により分類され、尺度化された。

まず、第1研究では、この尺度の因子構造や信頼性・妥当性の検討を行った。その結果、五つの因子を抽出し、抽出順に、孤立、対人関係スキル、利己的友人観、表面的友人関係、友だちの固定化と命名した。第一因子の「孤立」は、「友だちと遊ぶより一人で遊ぶことの方が多い」という項目に代表されるように、他者との交流を求めない対人関係のあり方を測定している。第二因子の「対人関係スキル」は、「友だちのことでトラブルが起きても上手に解決できる方である」という項目にあるように、他者と関係を形成・維持していく上での能力であり、対人関係がうまくとれな

いという意味での希薄さを測定していると言える。第三因子の「利己的友人観」は、「自分の都合は考えるが友だちの都合は考えない方である」という項目に代表されるように、他者を利する観点の欠落ないしは弱さを測定していると言える。第四因子の「表面的友人関係」は、「自分にとって大切な話は仲のよい友だちにもしない方である」という項目に見られるように、他者と視点を共有することを避ける関係のあり方を測定している。第五因子の「友だちの固定化」は、「遊ぶ友だちはだいたいいつも決まっている」という項目から予想されるように、いろいろな友だちを求めるのではなく限られた友だちと交流する、いわば人間関係に対する関心の少なさを測定しているものと言える。これら五つの因子は、既存の尺度との収束の妥当性も確認された。

第2研究では、この希薄さ尺度を用いて、児童の攻撃性との関係を検討した。攻撃性を「他の個体に対して危害を加えようと意図した行動やモノに八つ当たりするような発散行動を引き起こす内的過程」と定義した上で大芦・大竹・島井・安藤 (1998) の小学生用攻撃性尺度 (HAQC) をベースに作成した。その際、定義と合致しない項目は省いた。例えば、「嫌なときは嫌だとはっきり言う」という項目は、相手に危害を加えようという意図はないので尺度から除外した。また、HAQCの下位尺度である「敵意」は、「友だちにばかにされているかもしれない」という項目に見られるように、特定の対象に対する攻撃性の現れというより、友だち全般に対する否定的感情という方が適切である。従って、「友だちに注意されてカチンとくる」といった項目を新たに作成した。因子分析の結果、攻撃性尺度は、「喧嘩に伴う言語的攻撃」「身体的攻撃」「敵意」「発散行動」の四つの因子を抽出した。そして、希薄さ尺度の各因子との相関を求めたところ、利己的友人観因子と攻撃性の各因子との間に高い相関が見られ、友だちの都合より自分の都合を優先すると考える児童ほど、攻撃性が高いことが明らかになった。

第3研究では、個性記述的アプローチを用いて、児童の対人関係の希薄さを検討した。それまでの二つの研究が児童の平均的な傾向を知る目的で行われていたため、第3研究では、これらの知見を踏まえ、一人ひとりの児童をもっと多角的に見ることを目的とした。そこで、希薄さ尺度や攻撃性尺度といった自己評定尺度による調査だけでなく、相手から叩かれる状況など三つの葛藤場面を設定し、その場面における相手の意図と生起感情について自由記述させた。また、児童の自己評価だけでなく、児童の担任教師からの普段の観察や評価も併せて検討した。その結果、ある利己的友人観の高い子どもが、予想に反して多くの意図を考えることができていた。他者の視点を取り込めないとすれば、様々な意図を考えることはできないのだが、この児はそうした能力ではなく、ムカつくことやムカつく意図を想起しやすい傾向をとらえていたと判断した。それは、担任教師の観察・評価を踏まえた多面的なものであり、自己評定尺度による調査だけでは決して明らかにならない知見であろう。

本研究では、この猿渡 (2001) の研究を踏まえ、児童の対人関係の希薄さについて検討していくことを目的とする。その際、主として、第3研究で用いた方法を用いる。先に挙げた方法は、投影法的なもので、刺激として提示された状況に対する反応を測定するものである。もちろん、自己評

定尺度による方法と同様、測定されるものは明確なので回答の歪みが生じることは十分に考えられるが、自己評定尺度は通状況的、つまり、回答者が自由に状況を想起できるのに対して、こうした方法は特定の状況を設定するため、状況の想起が制約されるという特徴がある。また、得られた反応は逆に、リッカート法を用いた自己評定尺度での反応と比べ、被験者に開かれているので自由に表現できるメリットがある。

なお、状況は攻撃と援助の二つを設定し、各場面において、攻撃ないしは援助をする相手の意図と生起感情を自由記述させた。これらの場面は児童たちにとって比較的日常的な状況であり、そうした状況で相手の立場をどのように理解するかをとおして、対人関係の希薄さを考えることは、自己評定尺度による方法から得られる情報に新たな視点を提供することができると思われる。

【方 法】

調査回答者

鹿児島市内の小学校5年生男子48名、女子47名の計95名。

質問紙の構成

1) 対人関係の希薄さ

猿渡(2001)が作成した尺度であり、孤立、対人関係スキル、利己的友人観、表面的友人関係、友人の固定化の五因子から構成されている。

2) 攻撃性

猿渡(2001)が、HAQC(大芦ら, 1998)をもとに作成した尺度であり、喧嘩に伴う言語的攻撃、身体的攻撃、敵意、発散行動の四因子から構成されている。

なお、これら二つの尺度は、いずれも4件法である。

3) 攻撃・援助に対する反応

場面想定法を用いて、回答者の自由な反応を得るために作成した。攻撃場面では、Fig. 1に示すように、「頭を叩いている」状況を取り上げ、「なぜ、友だちはあなたを叩いてくるのでしょうか」という質問によって、相手の攻撃意図を時間内に思いっただけ記述してもらおうといった方法を採用した。そして、「あなたはどんな気持ちになりますか」と質問し、そのよう



Fig. 1 本調査に用いた攻撃場面



Fig. 2 本調査に用いた援助場面

な状況で自分に生起する感情を自由に記述してもらった。

援助場面 (Fig. 2) も同様に、「あなたが困っている時に、友だちが話しかけてくる」状況を取り上げ、「なぜ友だちは話しかけてきたのでしょうか」という質問によって、相手の援助意図を時間内に思いつくだけ記述してもらった。そして、「あなたはどんな気持ちになりますか」と質問し、自分に生起する感情を自由に記述してもらった。

手続き

担任教師に依頼して、各教室で一斉に実施した。

【結 果】

尺度の内的整合性の検討

本研究では、猿渡 (2001) の対人関係の希薄さ尺度と攻撃性尺度を使用した。これらの尺度の因子的安定性と内的整合性を検討するために、改めて因子分析 (一般化された最小二乗法, promax 回転) を行い、 α 係数を算出した。その結果、希薄さ尺度では、先行研究と同様に 5 因子を抽出した (分散説明率 55.56%)。各因子に高く負荷していた項目も、先行研究とほぼ同様であった。また、孤立が $\alpha = .83$, 対人関係スキルが $\alpha = .76$, 利己的友人観が $\alpha = .66$, 友人の固定化が $\alpha = .66$, 表面的友人関係が $\alpha = .47$ であった。表面的友人関係の内的整合性は高いとは言えないが、これまでの三度の調査でほぼ同様の項目がこれらの因子に高く負荷していたことを考慮して、それぞれ高く負荷した項目を加算し項目数で除して得点化した。

一方、攻撃性尺度も同様に因子分析 (一般化された最小二乗法, promax 回転) を行った結果、先行研究と同様に 4 因子を抽出した (分散説明率 51.58%)。各因子に高く負荷していた項目も先行研究とほぼ同様であった。 α 係数を求めたところ、喧嘩に伴う言語的攻撃 (以下、言語的攻撃) で $\alpha = .84$, 身体的攻撃が $\alpha = .78$, 敵意が $\alpha = .84$, 発散行動が $\alpha = .60$ であった。こちらも発散行動は比較的低いが、やはり、先行研究とほぼ同様の項目がこれらの因子に高く負荷していたことを考慮し、それぞれ高く負荷した項目を加算し項目数で除して得点化した。

各尺度の基礎統計量

各尺度、下位尺度の平均・標準偏差を Table 1 に示した。それぞれ欠損値のため値が算出できないサンプルは除外して算出した。

まず、利己的友人観の平均は、中央点 (2.5点) より低く、全体の 7 割の児童が、自分の都合で友だちを利用していないと評価していた。孤立の平均も同様に低く、やはり 7 割の児童が一人で遊ぶことを否定していた。

攻撃性に着目してみると、発散行動だけが中央点より平均値が低く、他者に比べると、モノに当たるといふ攻撃行動を用いていないと評価していた。

Table 1 各下位尺度の基礎統計量 (n = 95)

	平均	標準偏差	レンジ
人間関係の希薄さ			
孤立	1.70	0.67	1.00-3.60
対人関係スキル	2.57	0.50	1.67-3.83
利己的友人観	1.90	0.54	1.00-3.25
友人の固定化	2.71	0.67	1.33-4.00
表面的友人関係	2.44	0.80	1.00-4.00
攻撃性			
言語的攻撃	2.45	0.57	1.10-4.00
身体的攻撃	2.49	0.62	1.17-4.00
敵意	2.35	0.79	1.00-4.00
発散行動	1.58	0.51	1.00-3.25

Note. 欠損値があるため、各下位尺度の人数はn = 95と一致しない。

Table 2 対人関係の希薄さ尺度、攻撃性尺度の各下位尺度間の相関

	言語的攻撃	身体的攻撃	敵意	発散行動
孤立	-.131	.001	.011	.284**
対人関係スキル	.245*	-.005	.060	-.196
利己的友人観	.367***	.165	.354***	.295**
友人の固定化	.302**	.362***	.348***	.081
表面的友人関係	-.017	-.033	-.191	.025

Note. * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

対人関係の希薄さと攻撃性の関係

各下位尺度間の関係を検討するために、相関係数を算出した (Table 2)。その結果、利己的友人観と言語的攻撃、敵意、発散行動との間に正の有意な相関が見られた。この結果は、猿渡 (2001) と同様の結果であり、利己的な友人観、つまり、自分の都合で友だちを利用するといった考え方をしている児童ほど、こうした攻撃性を高くもっていると言える。

友人の固定化も発散行動以外の攻撃性と有意な正の相関が得られた。決まった友だちと遊ぶ児童ほど攻撃性が高いことが言える。

対人関係スキルと言語的攻撃との間にも正の有意な相関が得られたが、これは、スキルを高く認知しているほど、言語的な攻撃を用いるということであった。

孤立は、発散行動と正の有意な相関が得られた。一人で遊ぶ子ほど、モノに当たる攻撃行動を用いていることになる。

攻撃意図の分類

本研究では、「友だちが頭を叩いてくる」場面を見て、叩かれた側からその相手の攻撃意図を思いつくだけ推測させた。全部で218の反応が得られた。平均で一人2.28個 (SD = 1.66) の反応が

得られた。この反応を、①自分の過失・加害（呼んでも無視した，約束を破った，悪いことをしたなど），②自分の存在（生意気，勉強ができる，邪魔，目障り，ムカつく，嫌い，嫌だなど），③叩いた相手の発散行動や八つ当たり（ストレス解消，つまらない，イライラしている，嫌なことがあった，先生に叱られたなど），④冗談や目的が不明なもの（ふざけている，遊び半分などで），⑤自分と呼ぶためなど攻撃以外の目的（用事があって，驚かそうとして，遊ぼうと誘う，一緒に話したいなど），⑥無反応，無理解に分けた。これらをさらに，自分が原因とされているもの（①，②），叩いた相手が原因とされているもの（③），攻撃性をもたないもの（④，⑤）に大別し，順に，外罰型，発散型，無罰型と呼ぶことにした。

複数挙げさせているため，外罰型と発散型の両方にまたがる児童もいたため，最終的に，複数型の四類型と無理解・無反応型の八つに分けた。その結果，外罰型（ $n=26$ ，27.4%），無罰型（ $n=19$ ，20.0%），外罰・無罰型（ $n=22$ ，23.2%）が多く，発散型やそれを含む複合型は少なかった。

攻撃に対する生起感情の分類

生起した感情を分類したところ，①怒り（頭にくる，ムカつくなど），②嫌悪感（嫌だ，嫌な気持ちになる），③不快感を伴う反応（なんで叩くのだろう，何かしたっけなど）に分けられた。自由記述であるため，回答者によっては複数のカテゴリーに含まれる感情を記述していた。

援助意図の分類

鉛筆をなくして困っている自分に友だちが声をかけてくれる場面を見て，声をかけた友だちの援助意図を思いっただけ推測させた。全部で197の反応が得られた。平均で一人2.07個（ $SD=1.23$ ）の反応が得られた。これらの反応を，①場面にそのまま反応（困っているから），②場面の様子から推測しようとしているもの（何を探しているのかな，どうしたのかなあ，様子の変など）③援助意志のあるもの（助けてあげたい，かわいそう）に大別し，順に，表面型，推測型，内面型とした。

援助に対する生起感情の分類

生起した感情を分類したところ，①困惑・羞恥（困ったなあ，恥ずかしいなあ），②期待（あの人が助けてくれるのかな，誰か見つけてくれないかななど），③嬉しさ・感謝（うれしい，ありがとう），④その他ネガティブな反応（話しかけないでくれ，放っておいてほしい，悲しくなる），⑤無反応に分けられた。

推測された意図と生起感情の関係

攻撃場面について，その意図と生起感情との関係を検討した。発散型とそれを含む型はサンプルが少ないため，発散を含む型としてまとめて，クロス集計を行った（Table 3）。その結果，無罰型で不快感を伴う反応が多く見られていたが，統計的には関係は認められなかった。

一方，援助場面については，羞恥・困惑とネガティブな反応とをまとめ，同様に検討したところ（Table 4），表面型では，羞恥・困惑が最も多く（ $n=13$ ，36.1%），推測型では期待（ $n=8$ ，42.1%）が，そして，内面型では嬉しさ・感謝（ $n=17$ ，53.1%）が最も多かった。

Table 3 攻撃場面における推測された意図と生起感情のクロス集計

推測された意図	生起感情					計
	怒り	嫌悪	不快感	複数	無反応 無理解	
外罰型	7	8	8	3	0	26
発散含型	7	6	3	3	0	25
無罰型	4	5	9	0	1	19
外罰・無罰型	6	6	7	5	0	18
無理解・無反応	1	4	0	0	2	7
計	25	29	27	11	3	95

Table 4 援助場面における推測された意図と生起感情のクロス集計

推測された意図	生起感情				計
	羞恥 困惑	期待	嬉しさ 感謝	無反応 無理解	
表面型	20	5	7	4	36
推測型	9	8	1	1	19
内面型	6	7	17	2	32
無理解・無反応	2	0	2	4	8
計	37	20	27	11	95

Table 5 攻撃・援助両場面間の推測された意図のクロス集計

攻撃行動	援助行動				計
	表面型	推測型	内面型	無反応 無理解	
外罰型	15	4	4	3	26
発散含む型	8	2	10	1	21
無罰型	4	6	8	1	19
外罰・無罰型	8	5	8	1	22
無理解・無反応	1	2	2	2	7
計	37	20	27	11	95

場面間の推測された意図の関係

頭を叩かれるという攻撃場面において、叩かれた自分に攻撃の原因を帰属させることは、叩いた相手の視点に立っているとは言えないと考えられる。しかし、そうした場面における意図の推測が果たして異なる場面でも共通しているのか不明である。そこで、攻撃、援助各場面での推測された意図の関係を検討するために、クロス集計を行った (Table 5)。その結果、援助場面での表面型は攻撃場面での外罰型であることが多く、推測型、内面型となるにつれてその割合は減る傾向にあった ($\chi^2(6)=10.97, p<.10$)。

推測された意図と自己評定尺度との関係

本研究では、自己評定尺度への反応と場面に対する反応という二つのアプローチを用いて対人関係の希薄さを検討したが、これらに共通の特徴があるのかを見ていくことは、尺度の信頼性を評価する上で必要であろう。そこで、各場面での意図を独立変数とし、希薄さ、攻撃性尺度を従属変数とした分散分析を行った。その結果、攻撃意図、援助意図それぞれ効果は特に見られなかった。

また、反応として得られた意図の数と自己評定尺度との相関を求めたところ、攻撃場面では、利己的友人観、対人関係スキル、友人の固定化とそれぞれ有意な正の相関が、援助場面では、特に有意な相関は見られなかった。

【考 察】

対人関係の希薄さと攻撃性の関係

本研究では、猿渡(2001)にならい、希薄さと攻撃性の関係を検討した。両尺度とも因子に含まれる内容としては再現性があり、そういう意味で信頼性はあると言える。両尺度間の相関分析を行ったところ、利己的友人観の高さは、攻撃性の高さに関連していた。これは、先行研究の知見と一致していた。つまり、自分の都合で友だちを利用するといった考えは、利他的な見方ができない、あるいはしていないことになり、このように自他の視点が相対化できないことが攻撃性の高さに現れていると考えられよう。

しかし一方で、対人関係スキルと言語的攻撃との間に正の有意な相関がみられたことは、先行研究で無相関であったことと矛盾する。本研究の結果は、大芦ら(1998)の結果と同じであった。つまり、HAQCの下位尺度である言語的攻撃は主張性を測定しているためにスキルの高さと正の相関がみられたのだが、そうすると、本研究で用いた「喧嘩に伴う言語的攻撃」因子も主張的な側面を含んでいる可能性が考えられる。その点では、攻撃性の定義にあった尺度であるとは評価できない。

攻撃・援助両場面に対する反応について

本研究では、猿渡(2001)の第3研究にならい、架空場面に対する反応を求めた。その際、攻撃場面だけでなく、援助場面も用いて、異なる視点から児童の対人関係の希薄さを検討した。今回採用した方法には問題で述べたように二つの特徴があった。一つは、場面を設定することで状況想起を限定した点であり、もう一つは、自由に記述させる点であった。前者の利点は、質問紙法にみられるように、特定の質問が回答者間で異なる状況をイメージさせないことにある。その一方で、特定の場面に対して反応させるために、得られた反応を一般化しにくいという欠点もある。後者の利点は、自由に記述させることで児童の反応の幅を広げることにあるが、その一方で、得られた反応から共通性を探して分類することが困難という欠点がある。実際、児童の反応を分類するにあたり、その分類基準が適切であったかは疑わしい。

しかし、本研究の結果は、攻撃・援助両場面とも表現類型は異なるが、ある程度共通した特徴がみられた。推測された意図の分類では、攻撃場面での外罰型に分類された児童の多くが、援助場面での表面型に該当していた。つまり、叩いた相手の意図を叩かれた自分に帰属させる児童は、援助場面においても、場面にそのまま反応し、「困っていたから」と回答していた。この攻撃場面において、叩かれた自分に帰属させることは、相手の視点に立って原因を考えていないことを意味する。これに対して、発散型や無罰型は、少なくとも相手を含め、他の視点から原因を考えることができていると言える。一方の援助場面でも、困っている自分に声をかけてくれた相手の意図を考える際に、表面型は、表面的であり、自分の視点で回答している。これに対して、推測型では、「どうしたのかな」と相手の視点から見えており、さらに、内面型では「かわいそう」「助けてあげたい」と相手の視点に立つだけでなく、相手の気持ちになって意図を考えている。このことは、攻撃と援助という異なる場面ではあるが、一方の場面において、自分以外の視点からみることができる児童は、もう一方の場面においてもそうした見方ができていたということの意味している。

生起感情も併せて考えてみると、攻撃場面では自分が叩かれている状況なので、ほとんどの児童が怒りや嫌悪などのネガティブな感情を報告していた。推測された攻撃意図と生起感情との間に関係が見られなかったのは、たとえ、どのような原因に帰属しても、生じる感情は不快であったからだと考えられる。それに対して、援助場面では推測された援助意図と生起感情との間に明確な関係が見られた。表面型に含まれる児童は、嬉しいと答える児童より、困った・恥ずかしいと答える児童の方が多いのに対して、内面型に含まれる児童はその逆であった。つまり、自分の視点で意図を推測する児童は、自分からみれば助けてもらうという状況でネガティブな感情の方が生起しやすいのだが、相手の視点で意図を推測する児童は、この状況でポジティブな感情の方が生起しやすいという結果は興味深いと言える。このことは、利己的友人観が高いほど、攻撃性が高いという猿渡(2001)の結果とも一致すると言える。すなわち、自分の視点で見れば、援助場面も困っている自分がそこにいるという意味ではネガティブな状況であるので、不快な感情が生起することも十分に考えられる。本研究は、相手の視点に立てることがネガティブな感情ではなく、ポジティブな感情を喚起させやすいという点で、先行研究の知見を敷衍していると言えよう。

対人関係の希薄さを測る視点について

本研究では、自己評定尺度と、架空場面に対する自由記述という二つの測定方法で対人関係の希薄さを検討した。そのため、両手法間の相関も検討してみたが、攻撃意図の記述数に希薄さとの間に有意な相関が見られた以外は、特に関係は認められなかった。猿渡(2001)の第3研究で、記述数の多さは、いろいろな視点から見るができるという仮説を立てたが、得られた結果はムカつくことの想起しやすさを反映していたと結論づけた。しかし、本研究の結果は、この両方を支持する結果となっていたようである。つまり、利己的友人観の高さが攻撃場面の記述数と正の相関があるだけでなく、対人関係スキルとも正の相関が見られていた。このことは、自分の都合で相手を利用する児童ほど、攻撃意図を想起しやすかっただけでなく、人とうまくコミュニケーションできると考

える児童も、たくさん攻撃意図を想起していたことを意味している。

思いつくだけ自由に記述させた場合、想起の仕方は二つのタイプがあろう。一つは、同じ視点の記述が多く見られるタイプであり、ムカつくことを想起しやすい利己的友人観が高い児童はこれに該当するかもしれない。もう一つは、いくつかの異なる視点の記述が見られるタイプであり、こちらは対人関係スキルの高い児童がこれに該当するであろう。本研究ではサンプルが少ないために検討しなかったが、今後の課題として考える必要がある。

記述数以外の指標では関係が認められなかったが、これには、二つの見方が考えられよう。一つは、問題で指摘したように、それぞれの方法が測定している視点が異なっているという見方である。自己評定尺度では、通状況的な側面を測っているのに対して、架空場面に対する自由記述では、限定された状況を測定したためと言える。また、前者は、リッカート法を使用しているのに対して、後者は、自由記述法を用いているためであろう。こちらの見方は、方法論上の問題ではなく、むしろ、特定のアプローチしか行っていない他の研究よりも多くの知見を提供してくれる。

もう一つは、内省能力の発達の未熟さによるという見方である。青年期と比べ、前青年期の児童を対象とする場合、自己内省能力は発達途上にあると思われる。従って、たとえ同じ内容を測定していたとしても、架空場面という絵の中の物語に回答する場合と比べると、難易度が異なるであろう。

この点に関連して、前青年期、つまり児童の対人関係の希薄さを考えていく上で留意すべき点がある。それは、自己内省能力に限らず、相手の視点の獲得にしても、社会的なスキルにしても、これらの能力は、発達途上にあるということである。青年期は、そうした能力が獲得された段階での評価として希薄化していると言えるが、前青年期では、獲得されつつあるという発達上の希薄さも考慮していかなければならない。本研究ではこの点が十分に吟味されているとは言い難い。

本研究の問題点と今後の課題

本研究は、児童の対人関係の希薄さについて、自己評定による方法と場面想定による方法の二つのアプローチから検討していった。その結果、自己評定法では、猿渡 (2001) の結果とほぼ同様の結果が得られ、また、場面想定法では、援助場面を新たに取り入れ、相手の視点に立つことと生起する感情との関係について新たな知見を得た。

しかし、その一方でいくつか問題点も指摘されよう。一つは、得られた自由記述の分類の妥当性、信頼性である。本研究の分類は、十分な議論を重ねて行ったのだが、その客観性に問題がないわけではない。その点で、この架空場面への反応に対する適切な分類法を確立していく必要がある。

もう一つは、対人関係の希薄さを検討する上で、果たして攻撃、援助の両場面だけで十分であるかという点である。対人葛藤を引き起こす状況は、自他の視点が相対化できているかどうかを検討する (折谷, 1999) 上で有用であると思われる。しかし、猿渡 (2001) が定義した対人関係の希薄さのすべてを吟味できているとは言い難い。その意味で、他の場面を設定したり、設問を工夫した

りして、さまざまな角度から検討していく必要がある。

最後に、上述したように、本研究では、児童を対象にしているため、対人関係の希薄さに発達上の希薄さを含めてしまっている可能性があるということである。それは、本来、親密でかつ成熟した対人関係がどのようなものなのかという定義にも関わるが、今後は、児童と青年との比較も含め、こうした問題をクリアしていく手法を工夫していく必要がある。

【引用文献】

- Buhrmester, D. & Furman, W. 1986 The changing functions of friends in childhood: A neo-sullivanian perspective. In V.J. Derlega & B.A. Winstead (Eds.), *Friendship and social interaction*. Springer-Verlag.
- 江村理奈・有倉巳幸・岡安孝弘 2000 中学生の不登校傾向と適応状態 日本教育心理学会第42回大会発表論文集, P. 677.
- 小嶋秀夫・宮川充司・佐藤朗子 1998 小学生のソーシャルサポートの構造と機能(5) 日本教育心理学会第40回大会発表論文集, P. 81.
- 森下正康 1998 「学校ストレス」が子どものストレス反応に及ぼす影響とソーシャル・サポート 日本心理学会代62回大会発表論文集, P. 74.
- 丹羽洋子 1999 児童生徒の社会的：情緒的発達研究の動向 教育心理学年報, 39, 51-60.
- 岡田 努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.
- 岡田 努 1999 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究, 47, 432-439.
- 尾見 康博 1999 子どもたちのソーシャル・サポート・ネットワークに関する横断的研究 教育心理学研究, 47, 40-48.
- 大芦 治・大竹恵子・島井哲志・安藤明人 1998 小学生用攻撃性質問紙 (HAQC) の作成(1) -45項目版の調査の実施と項目の選択- 日本心理学会第62回大会論文集, P. 927.
- 折谷 妙子 1999 対人葛藤の性質と防衛的なつきあい方の関係について 日本社会心理学会第40回大会発表論文集, Pp. 330-331.
- 猿渡 功 2001 児童の対人関係の希薄さと攻撃性の関係 平成12年度鹿児島大学大学院教育学研究科修士論文 (未公刊)
- 佐藤正二・立元 真 1998 児童生徒の対人関係と社会的適応・予防的介入 教育心理学年報, 38, 51-63.
- 遠矢 幸子 1996 友人関係の特性と展開 大坊郁夫・奥田秀宇(編) 対人行動学研究シリーズ3 親密な対人関係の科学, 誠信書房, Pp. 89-116.
- 上野行良・上瀬由美子・松井 豊・福富 護 1994 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, 42, 21-28.
- 有倉巳幸・伊藤由美・菊川康子・大谷哲朗 1999 母親からのソーシャルサポートと子どもの精神的健康の関係 - 児童, 母親, 担任教師による複数の評価を用いて - 鹿児島女子大学研究紀要, 20(2), 77-94.

追記

本研究の一部は、日本教育心理学会第43回大会にて発表された。